



Title	大会印象記
Author(s)	大館, 智氏
Citation	進化学会ニュース, 6(2), 44-45
Issue Date	2005-11-15
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/44590">http://hdl.handle.net/2115/44590</a>
Type	column
File Information	SGN6-2_44-45.pdf



[Instructions for use](#)

加の回数は少ないです。一方で生態学会は毎年参加しています。哺乳類学会のような自分のフィールドそのものの集まりでは話は通じやすいのですが、なかなか人との会話から自分の研究への新たなヒントを得るという機会が少なくなりがちです。この点、生態学会は、対象も植物や無脊椎動物、微生物など別の生物を扱っている人や数理生態、景観生態、保全生態学などいろいろな分野の研究者が集まるので、得るものが多いです。そしてこの進化学会のように進化に関してなら「なんでもあり」の学会ではさらに自分の分野外の話の話を聞いて、自分の凝り固まった頭に新鮮な息吹を与えてくれます。正直言うと、このごろは学会に参加しても、自分の発表か特に聞きたい人の発表、集会に出席する以外はさぼって付近の観光に行きがちでした（一応、やるべきことはしているので公費の濫用ではありませんので念のため!）。しかし、今回の進化学会では、刺激的なタイトルの発表が多々あり、最初から最後まできちんと参加しました。とても観光している暇などなかったです（仙台は有名な観光地がないのも幸いしました?）。

個人的には言語の起源と進化、行動進化の遺伝子機構などが、まったくの専門外で興味深かったです。また、ポスターでも非生物の進化など、自分ではあまり関与しないような発表を目指して聞いていました。しかしポスターの場合はその場でいかようにも質問できるのですが、オーラルではどんどん話が進んでいくので、話についていけないことが多かったです。

今後の進化学会の方向として、このように広範囲の分野のシンポジウム、ワークショップ、企画など中心に組み立てていくのは、参加を促す方法として正解だとおもいます。しかし、参加者も多くなり扱う分野が広くなると、会員同士の意思疎通がおろそかになる恐れがあります。私の理解では学会の設立当時では、異分野の人にも分かるような発表をすることが、暗黙のあるいは明瞭な了解ごととしてあったように思います。しかし、今回は必ずしもそれがうまく機能していないような印象を受けました。

#### ■ 大舘智氏（北大・低温研）

私は本学会の設立発起人の一人とはなっていますが、毎回大会に参加しているわけではなくこの東北大学での大会が3度目です。仙台への訪問は02年に生態学会で訪れて以来2回目です。私は8月26日の受賞講演から参加し、8月29日の朝に帰りました。今回は自分自身の発表はなく、気楽な参加でした。できるなら夏の学校にも出席したかったのですが、いろいろな所用があり今回も出席できませんでした。

私は哺乳類を主な研究対象とした生態学を専門としていますが、哺乳類学会への参

進化学会の規模が大きくなることは、社会への啓蒙、教育活動などの貢献を考えた時、メリットが大きいですが、学会としてのまとまりを考えた場合、ともすれば会員同士のコミュニケーションがしにくくなるというデメリットもあります。いきなり、その分野の最先端の論議を専門タームやジャーゴンを使ってされると、異分野からの聴衆の死亡率があがります。専門的論争はそれぞれの専門の学会でやればすむことで、進化学会では、オーディエンスが専門外であることも念頭に置いて、それでいて最先端の面白い出来事を伝えることが必要です。大会の実行委員会も各集会の責任者や発表者にこのような教育的指導を徹底すべきだと思います。またこれからの学会としても「進化」をキーワードとして様々な分野の研究者を積極的に参加してもらおう（絡めとる？）ことが、学会発展の条件の一つだと思います。

大会最終日には偶然バスを待ち合わせていた、三島の近隣におられるNS師、京のオサ（長？）TS氏、つくばのNMオーナーなど、「濃〜い」面々と飲みにいきました。こんなメンバーが同席することなど進化学会以外にはあり得ません。これも進化学会のメリットの一つです。

最後にこのような難しい大会を準備していただいた東北大学の河田雅圭さんをはじめとする方々に、心から感謝いたします。

---